

万德幽靈奇譚

万徳幽霊奇譚

金石範

筑摩書房

万徳幽霊奇譚

一九七一年十一月十日 初版第一刷発行
一九七一年十二月二十日 初版第二刷発行

定価 六五〇円

著者 金石範

発行者 竹之内 静雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話 東京(二九二七六五一(代表)
振替 東京 四一一二三
郵便番号 一〇一一九一

装幀者 中島かほる

印刷 睦印刷
製本 矢島製本

© 1971, S. Kim

(分類) 0093 (製品) 80074 (出版社) 4604

万德幽靈奇譚

一

深い谷間の奥の観音寺に一人の飯炊きの小坊主つまり寺男がいたが、人は彼をうすのろと呼んだ。そうでないときには万徳マンドクと呼んだ。またそうでないときにはただの寺男と呼んだ。中でも万徳というのがいっとうましな名前なのだが、それは彼の法名として付けられたものだ。ところで法名があればそれに取って代られた出家以前のいわゆる俗名があるはずだったが、彼にはその俗名なるものがなかった。ただケートン（犬糞）というあだ名だけがあって、それが彼の名前のいっさいであった。つまり彼は幼少からの名無しなのである。名無しの存在は周囲の人間にえてして人生の忘れ物でもしたような妙な気持を起さすものだ。にも拘らず人々は万徳という名を付けられてからの彼に向っても、ながいあいだケートンという呼び名を捨てなかったのである。

しかし古今東西、人は下層の人間の素性にはさしたる関心を及ぼさぬのが慣わしだったといえよう。わが朝鮮においてはまさしく左様である。朝鮮で寺男、飯炊きの小坊主といえ、作男同様、元来卑賤の生れというわけで、人は万徳のたぐいの素性不明は奇としない。素性だけではない。それらしき、つまり人間らしき名前がなくとも別に氣にとめもしないのだ。だいたい路傍の乞食を見て人はその名を知りたがるだろうか。ソウル駅正面出口左側のあの円柱の下の乞食、それからパゴタ公園入口の片目の乞食と跛びつこの乞食、昌慶苑の桜の木の下の袖引きの乞食などでけっこう間に合うのだ。

だから寺男のたぐいの人間も、それは朝鮮では「供養主コシヤシユ」というのだが、彼らは名前があってもよい、なくともよい存在である。ただこき使うための寺男という実体があつて、それから、おういッとか、これッとか呼ぶ場合と同様の、なにか音の印しさえあれば足りる。卑近な姓名からしてそうであるから、さらにその向うのところにある出身地や両親や、年齢のことなどが定かであらうはずがない。だからかりに死後鬼籍に編入される段になつても、それまでの娑婆世界におけるその存命期間でさえ明らかでないことがありうるのだ。

たとえば万徳の生涯にしてもそれは短いものだったが、それでも彼の年齢を正確に知るものはいなかった。死刑執行台帳には二十四歳と記載されていたが、それはあてにならない。まず本人自身その年齢をはっきり知らなかったのだから。その二十四歳という計算は、数年前、日帝時代の末期にこの孤島の済州島から北海道のクロム鉱山へ徴用で引っぱられてゆかれたときから始まる。生れたときから戸籍簿に縁がなかったにちがいない名無しの彼に、本籍、年齢、父母、姓名などを訊ねてみたところでロクな答えが出るはずがない。そういう記号を持たぬ人間は徴用当局にとっては、リスト作成の手がかりのない厄介ものになる。住所不定や浮浪者であっても即刻連行してタコ部屋へ送りこむ分には一向に差支えはないが、しかし生年月日、とくに姓名不明ではその徴用者名簿の作成にさえ困るのだ。それでそのとき「一郎」という日本式の名を「万徳」という名の下にくっつけて、つまり名である「万徳」を姓に変えて当局は、万徳一郎まんとくいちろうという妙な名前を付けた。ところが万徳はまるっきり日本語を解さない。わっしは万徳一郎ではない。それは自分の名前ではない。自分の名前はマントクではなく、法名といってマンドギの「万徳」なんだと、漢

字のその二文字を、わざわざ紙を置いて、鉛筆を舐め舐め、ていねいに書いて見せる。バカヤロウ！ 苗字もないやつが何の文句がある、日本人には苗字のない人間はおらんのだ、おまえも日本人としての名前を持って人間なみにして貰えるのを榮譽とせねばならんぞ、と通訳付きで当局の役人はいった。それでも彼は万徳一郎という人間はわっしは知らぬといい張ったのだった。彼にはおまえは日本人だといわれ、日本人だとなられてもさっぱりそのわけが分らなかつた。ニッポンテイコクシンミンだからおまえは日本人だといわれても、彼の五臓六腑がその「日本人」にぜんぜんなじまなかつたのだ。そうして年齢の方もことのついでにそのときあてずっぽうに授かつたというわけだった。それから起算すれば当年とって二十四歳になる。

だいたいどこでも卑賤の生れのあり様はそういうものだといえるだろう。乞食や、作男や、「白丁」ベソウチョウ（昔、屠殺などを業として、最も卑賤なものとされた社会的階層の一つ）や、寺男たちなどは総じてそういう部類に入る。

つまり万徳マンデクの例をとって見ても、名前はあらためて万徳と付けなくとも、コンヤンジュー——寺男だけでも不足はしないのだ。世間ではそういう余りばつとしない生れの人間を「四」

柱八字^{ジュンパチ}」のせいにする。「四柱八字」というのは生年月日の、例えば甲子年、乙丑月、丙寅日、丁卯時を「四柱^{サジュ}」とし、この四柱の干支^{カネ}になる文字を組合せて「八字^{パンチヤ}」とするのだが、これを基本にしてその人間の一生の運勢を占うのであって、これは人々の因果応報的な考えに拍車をかけることになるのだ。つまり王様や大臣になるような「八字」はとてつもなく素晴らしく、万徳のごとき貧乏で卑賤の生れはこれすべて「四柱八字^{ジュンパチ}」のせいなの何ものでもないということになってしまふわけである。まるで一種の麻薬もどきのものであつて、「四柱八字」はまさにその意味では昔からこの国の為政者たちにとってはいろいろと都合のよいような役割を果たしてきたにちがいない。

村の、白髪の汚れの目立つ瘦せこけた、見るからに貧相でそのよき「八字^{ジュンパチ}」とは縁のないさそうな識者先生が、人々に「四柱八字^{ジュンパチ}」の御託宣をするのだからおもしろい。彼は鬚髯^{しゆぜん}の中から一メートルはあるキセルを突き出し、諸葛孔明が制定したと信じてやまぬその古い秘訣の解釈本と小さい算盤を手にして卦の数を計算する。それからおもむろに人の一生と当年の運勢に対する開陳をはじめ。うふむ、この卦は、天涯孤獨の身、おのれの身を

委托するところなしといえども、遠く旅の人となれば救済の士があらわれん、という卦じやなあ。すなわちじや、茫々の大海、風に遭遇せし扁舟というところか……南に、北にゆき、目を挙げれども、親近の士なし。うふむ……南北に離別、なお合掌して大笑……の卦じやなあ云々。

なるほど、なる……うまいことあたるもんだ、そうであればこの卑賤の身はそのせいだったかも知れんと、本人たちは世間の慣わしにしたがってちょっと考えてみる。しかしまもなくワハッハッと笑いとばして村の識者先生の御託宣を毫も受けつけない。どだい生年月日時（い、い、と）の干支（えと）の組合せから成立する「四柱八字」とやらは、ほんとうの生年月日時の月日時はおろか年も分らぬ彼らにあて嵌まる道理がないではないか。

それにしても英雄でもない限り、人間はできれば平穩無事にフトンの上で死にたいものだと思う。もちろん万徳はただの寺男であつて、フトンの上で往生することを潔しとせぬ英雄豪傑の類ではない。それにも拘らず彼はフトンの上で死ぬことのできなかった、識者先生の言にしたがえば、いわゆる悪しき「四柱八字（しちゅうはつじ）」の持主だったのだ。

万徳はその両親を知らなかった。両親だけではない。自分の姓も名も知らない。氏を尊ぶこと父母へのそれに勝るとも劣ることのない、いわば「東方礼儀之國」の民としては、もうそれだけで市民権を剝奪されてしかるべきとされる。それだけで、まっとうな人間たちの仲間入りなどは到底できぬものとされるのだ。しかしそれはなにも万徳のせいではないだろう。彼はただただ自然の命ずるままに生れてきただけのことだから。その万徳という名前にしてもそもそもからあったものではない。彼は幼少のころの自分の名はケートン（犬糞）としかおぼえていないのだ。その「ケートン」という呼称は一般に庶民のあいだで「金枝玉葉」にも喩えるべき子にそれも男児に限って付けられるあだ名である。つまり多くの子供が夭折して一人だけ生き残った息子のために、親は祈りをこめてそのあだ名を付けた。女ぎょうだいはかりの一人息子のために、幼少からの弱虫のために……親はそのあだ名を付けた。「ケートン」——犬畜生の糞という最低の呼び方の中に、逆にその子の健康や幸福への祈念をこめるといふまさに内なる愛の表現なのだった。だから万徳の幼少のころの名前がケートンだったことは、それだけで彼への親の愛情の形が想像されるので

ある。

もちろんいまの万徳には「ケートン」はまさしく過去のものになった。しかしそれでも彼の想起するその幼時は、かならずケートン！と、だれかが自分を呼ぶ声を通してのみ像を結びえ、それによってのみ目覚めうるものだった。それはたとえば最初は漠然とした母らしき人の声であったりする。するとまもなく、まだ幼少の、母親に背負われた自分の像が、山道を上り深い谷間の奥の山寺に辿りつくのであった。その途中で歩かされたりひっくり返ったりしながら、ケートン！ケートン！と母に小さい手を引っぱられた記憶が彼にはある。啞みたいだった母の他の声は聞きとれず、ただケートン！と一氣に出てくる場合の声だけが記憶の中にある。お寺では白いひげのものすごく長い老人の膝の上に抱かれて、じっと頭をなでられていたという記憶があった。その記憶の像すらも、傍で母らしき女がしきりになにかケートン！ケートン！といっていたその声といっしょに蘇るのだ。

じっさい万徳は、彼のその漠然とした記憶のとおりに母親に連れられて山の観音寺へ上

ったのだった。老和尚のまえに跪いたそのほとんど啞に近い丸顔の若い母親は、はるばる日本からやってきたといった。彼女は手真似を混じえながら子供を寺へあずけたいという。あずけるというよりも寺へ委せたいという。ぜんぜん泣くことを知らぬ子供を膝の上に抱いて訊ねる老和尚の、この子の父親はだれじゃな？ という問いに、彼女はにんまり笑い、分らぬと首を横にふった。うむ、どうしてじゃ？ という問いに、彼女はふたたびやさしく笑って、分らないという。ようやくひどい鼻声でどもりどもりながら、おいで、おいでといわれて、押入れに入ったら、子供がお腹にできたとです、と彼女がいった。で、それはどうしてじゃ？ と老和尚が訊ねた。この子は、この子とは、彼女はその白痴的ともいえる無垢の表情で静かに笑っていった。つまりケートンは、日本の大阪の朝鮮人聚落の近くにできたばかりの朝鮮の寺で、彼女が女飯炊き——供養主ゴンヤシジユをしていたころの子供だといふのだ。ある日、彼女一人で台所仕事をしていたところへちょっと顔見知りの男がぶらりと入ってきた。彼女相手に雑談をはじめた男は、つと立ち上って部屋を押入れを開けてからのぞき、そこへ入りこんだ。やがてそこから声がして、ちょっと来てみな、おいで、

おいでと手招きで彼女を呼ぶ。疑心というものを知らぬ彼女は、水洗いをしていた手を拭い、いわれるとおりにした。押入れに背を屈めて軀を入れると、男の方は押入れの戸を閉めたのであたりが真っ暗になったというのだ。もちろん男は去り、子を孕んだ彼女は寺を出た。それから最底辺を生き抜きながら、一応よちよち歩きのできるまでに育てあげたのがこの子だという。オシメの必要もなくなったいまは故郷の漢拏山（ハナサ）の寺へあずけたい、そしてどうか仏さまの力でりっぱな人間にしてほしいというのだった。彼女は粗末な子供の服やこわれた玩具の包みと、いくばくかの金を置いたが、老和尚は金は受け取らなかった。彼女は三日目に寺を離れて日本へ向い、消息を絶つ。寺を去るとき白い紙に包んだ黒い目玉飴をケートンの手に握らせたのだが、ケートンはぜんぜん泣きもせず彼女の後ろ姿を見つめていたのだ。

さて、寺はそのケートンを引取ったものの、まずはその名前の処置を考えた。神聖な寺の中で、「ケートン（犬糞）」「ケートン！」と呼ぶにはやはりはばかれるものがあるだろう。それにたとえ内なる愛情の声の逆説的表現だとはいえ、それはあくまであだ名で

あつてれっきとした人間の名前ではない。つまり名無しを是認する、その人格無視の呼び名は大慈大悲の法の世界ではまかりならぬことでもあるのだ。そういうことも手伝つて、先代の慈悲深い老和尚は、まず名前から、「万徳」^{マンドク}という、「ケートン」を裏返して見せた円満至極の名を付けてやった。しかもそれは俗人どもが労をいとわずうるさく詮索して廻り、果ては、何百年、いや千年の彼方に向つて遡つてゆく族譜の考証にまで発展しかねない、氏や本貫^{ほんぐん}も必要とせぬ法名という名目で付けられたものだった。

本貫といえは先の「四柱八字」と同様、読者にははなはだなじみの薄いものと思われるが、朝鮮に生を享けたものにとっては一生涯くつついて離れぬものなのだ。朝鮮の氏はすべて本貫を持っているのであつて、それはその氏の始祖が往古に定着した故郷のことをい、本籍よりもさらに遡るおそろしく大時代なものである。なによりも、本貫を同じくする同姓のあいだではそれが一千年のむかしに分岐してきた「親戚」であるにも拘らず、結婚を許されないというその一つの事実だけを取つて見てもその時代錯誤のほどが知れるというものだ。戸籍調べでもしておかぬ限り（戸籍には本貫が記入してあるのだから）恋愛

もうっかりできたものではない。もし敢えて禁を犯すものは、人倫にもとる犬畜生になり下って社会から葬り去られる。まあ、それにしても、だれが千年むかしのシンセキをいちいちおぼえていられるものか。わが万徳が結婚できる見込みなどはそもそもからありえなかったとしても、しかし彼がこの苦むした大氏族制度から自由でありえたのは、いや、はじめから相手にもされなかったのは、一つは大きくかかってその法名のせいにあるとせねばならぬだろう。

ところで「供養主」^{コンヤシジユ}というのは飯炊きの小坊主つまり寺男だけの謂ではない。もともとはれっきとした寺への施主を指すことばなのだ。その施主たちの善男善女がつどう華やかな、たとえば旧暦四月八日の釈迦降誕祭の灯火きらびやかな夜などに仏供養の裏方になって、汗で衣を洗う飯炊きたちを「供養主」^{コンヤシジユ}といい、全く施主たちと同じ呼び方をするのはおもしろい。というのは施主たちの面前で、寺の女管理人の「ソウルぼさつ」は、いつものごとくやたらに万徳を引っぱたいて金切声でわめくわけにはいかぬからだ。彼女はむかし、すれっからしの街ソウルで旅館の女番頭をしていたとかで「ソウル」が頭につき、信